様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月　９ 日現在

機関番号：３２６４１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ００８４５

研究課題名（和文）第二言語習得における思考パターンの習得順序について―移動表現を用いた考察

研究課題名（英文）A Study of the Acquisition Order of Thinking Patterns in Second Language Acquisition using Motion-event Descriptions

研究代表者
鈴木　ひろみ（SUZUKI, HIROMI）

中央大学・商学部・准教授

研究者番号：９０７８１１１２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,100,000円

研究成果の概要（和文）：「日中対照比較」の観点から、中国語・日本語の母語話者に対して行った作文調査（絵本を見て、物語を作る）のデータを用いて「発話のための思考」の先行研究を再論考した。その結果、中国語は「場面外視点」から「自己投入」し、日本語は「場面内視点」から「共感体験」を通して事態把握をする傾向があること、さらに、中国語母語話者は、言語情報に連続性を持たせた文を産出するため、絵本に書かれていない場面（情報）を前後の絵から推論・捕捉、それらを明示的に言語化していく傾向があるのに対し、日本語母語話者はより多くの「時間的な繋がり」の要素を取り入れることで、言語情報の連続性を確立する傾向にあることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
母語以外の言語を使う場合、文法的に正しくても、母語話者にとって違和感を覚える発話になる場合がある。それが、異なる母語話者間には異なる思考パターンが存在する所以であることは従来から指摘されてきた。翻訳ソフトが日進月歩の進展を遂げている現在、今後の第二言語習得における研究テーマとして、「自然な会話の生成」の必要性はますます高まると考える。思考パターンにおける認知言語学の研究成果を第二言語教育に応用することで、「自然な会話の生成」という難題を解決することができ、第二外国語学習理論の構築に貢献することができる。

研究成果の概要（英文）：From the perspective of a comparative analysis of Japanese and Chinese, we used data from a composition survey (look at a picture book and make up a story) conducted on native speakers of Chinese and Japanese to discuss about the previous research of “Thinking for Speech”. As a result, it was found that Chinese speakers have a tendency to “put themselves into the situation” from an “out-of-scene viewpoint”, while Japanese speakers tend to “experience empathy” from an “in-scene viewpoint” in order to express their hopes for the situation. Furthermore, Chinese native speakers tend to infer and supplement scenes (information) not described in the picture book from the preceding and following pictures, and to verbalize them explicitly in order to produce sentences with continuity in the linguistic information. In contrast, Japanese native speakers tend to produce sentences with continuity of linguistic information by incorporating more elements of “temporal connections”.

研究分野：第二言語習得

キーワード：発話のための思考　場面外視点　場面内視点

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

## １．研究開始当初の背景

言語における移動表現に関する認知的アプローチの先行研究には、Talmy(1985、1991、2000)、宮島（1994）、田中・松本（1997）、丸尾（2000）、柯理思（2003）などがある。移動表現は言語表現において、極めて基本的なものとして位置づけられており、これまでは日本語と中国語の移動表現を表す言語形式上に現れる差異について、日本語は動詞枠付け言語（中核スキーマである移動経路を動詞で表現することが多い、例：上がる、登る）、中国語は付随要素枠付け言語（中核スキーマである移動経路を複合動詞の後項動詞で表現することが多い、例：跑上来，爬过去）に分類されるためという観点からの説明がなされてきた。

Slobin(1996 など)は“ thinking for speaking ”認知論の「発話のための思考」の観点から、“ FROG,WHERE ARE YOU？ ” M.Mayar(1969)」という文字のない絵本における場面の描写において、英語、スペイン語などでの言語間を比較した。その結果、付随要素枠付け言語の話者は移動の様態を細かく表現する傾向があるのに対し、動詞枠付け言語の話者はしばしば様態を略する傾向にあるのは、言語で表現するための事象のどの部分に注目するかが言語毎に異なるためであると論じた。一方で、第二言語習得に関する研究は 1960 年代より隆盛し、特に、Krashen が 1970 年代から 1980 年代にかけて提唱した五つの仮説（①習得一学習仮説、②自然習得順序仮説、③モニター仮説、④インプット仮説、⑤情意フィルター仮説）が語学教育に大きな影響を与えた。第二言語学習者は形態素習得や文法習得の際に一定の決まった段階をたどりながら習得を進めていくことが多くの研究により明らかにされてきている中で、「思考パターン」の習得順序に関する研究は複数の分野にまたがっているため、十分に行われて来なかった。

## ２．研究の目的

本研究の目的は、日本語と中国語の移動表現に見られる幾つかの思考パターンに表れる違いに対して、A)思考パターンは習得可能なものであるかどうか、B) 可能であれば、学習期間と習熟度の関連性はどのようなものであるのか、C)思考パターンにおける習得の順序はどのようなものか、について質的研究し、その研究成果を教育の現場に応用することにより、学習者の学習効率の向上に貢献することである。

## ３．研究の方法

“ FROG,WHERE ARE YOU？ ”という絵本を調査対象者に与え、調査対象者の母語及び学習対象言語によるストーリを作成させた上、思考パターンの観点から移動表現に関わる発話内容を抽出し、思考パターンの習得状況を考察する。被験者のデータを分析する際に、十分な結果が得られなかった場合を鑑み、調査人数を調整した上、再調査を行う。初年度には、①思考パターンから見た移動表現の日中比較に関する先行研発をまとめる、②習熟度別レベル分けテストを実施した上、一度予備データを収集する。レベルテストの妥当性や回収した調査データの妥当性を確認した後、調査手順に沿って本調査を行う。二年目には、初年度で得られた紙媒体調査紙の詳細な分析を行うと共に、上述した研究成果の検証を行う。なお、最終年度の三年目には、中国語教育学会などにおいて、研究成果の報告及び理論構築検討のためのディスカッションを行うことで研究の方向性の確認も行い、理論構築完成に向けた精査を行っていく。

**４．研究成果〔論文〕**

（１）『汉日语言对比研究论丛』**第 11** 辑

**「「場面外視点」と「場面内視点」から見る中国語と日本語」**

**本論文は、中国語・日本語の母語話者、合計212 名に対して「絵本を見て、物語を作る」という作文調査を行った。調査によって得られた作文データを「場面外視点」、「場面内視点」の概念に基づき、まず中国語と日本語の視点の転換の自由度に焦点を当て考察した。次に、絵本の登場人物の心理的場面を描写する際に現れる、中国語と日本語の事態把握の違いについて「自己投入」と「共感体験」を用いて説明することを試みた。本研究では中国語は「場面外視点」から「自己投入」し、日本語は「場面内視点」から「共感体験」を通して事態把握をする傾向があることを明らかにした。**

（２）『汉日语言对比研究论丛』**第 12** 辑

**「言語情報の連続性に現れる差異について―中国語と日本語の比較―」**

**本論文は、中国語母語話者と日本語母語話者への作文調査で得られたデータを研究材料として、調査協力者が産出した文を「言語情報の連続性」という観点から分析した。その結果、「場面外視点」を取る中国語母語話者は、言語情報に連続性を持たせた文を産出するため、絵本に書かれていない場面（情報）を前後の絵から推論、捕捉して、それらを明示的に言語化していく傾向がある。それに対して、「場面内視点」を取る日本語母語話者は、絵本に描かれている情報を「見えのまま」に言語化していくが、中国語母語話者よりも多くの「時間的な繋がり」の要素を取り入れることで、言語情報の連続性を確立させていたことが明らかになった。**

**研究成果〔学会発表〕**

《汉日空间位移事件途径显性化对比研究》

对于不同语言中存在的位移表达方式的差异，以往大多是从语言类型（动词框架语言，等价框架语言，附加语框架语言）、语法结构、词汇化等角度进行分析解释。但从这些研究角度无法解释即使汉日语言中存在着同样的表达方式，以汉语为母语的人和以日语为母语的人也往往会因为思维模式的不同而采取不同的表达方式的这一现象。对此，笔者从空间位移事件途径显性化的这个角度，通过问卷的调查结果归纳出汉语和日语之间的差异，并对其差异产生的原因进行分析。

**コロナ禍などの影響により、当初の研究目的である「思考パターンの習得順序」に関する研究成果は十分に出せなかったものの、日本語と中国語における事態把握の違いについて上述の研究成果をあげることができた。今後、中国語母語話者と日本語母語話者の調査協力者から得られた、“ FROG,WHERE ARE YOU？ ”に関しての作文例の内、研究期間内で扱うことの出来なかった部分について更に考察を重ね、実証的研究を積み重ねていくことにより、複雑な様相を呈する中国語と日本語の事態把握の全体像に迫ってまいりたい。**

**＜引用文献＞**

①Talmy,1985. Lexicalization patterns: Semantic structure in lexical forms. Language Typology and syntactic description, Vol.3, Grammatical categories and the lexicon, ed. Timothy Shopen,57-149.Cambridge University Press.

②Talmy,1991. Path to Realization: A Typology of Event Conflation, Berkeley Linguistics Society, 17,480-519.

③Talmy,2000. Toward a Cognitive Semantics Vol. II: Typology and process in Concept Structuring. Cambridge: MIT Press.
④宮島達夫、1994、『語彙論研究』、むぎ書房。
⑤田中茂範・松本曜、1997、『空間と移動の表現』、研究社。
⑥丸尾誠、2000、“去+VP”形式と“VP+去”形式について：VP が“去”の目的を表す場合,『名古屋大學中國語學文學論集」（13）、27－42。
⑦柯理思、2003、汉语空间位移事件的语言表达－兼论述趋式的几个问题、《现代中国语研究》第5期、1－18。
⑧Slobin,1996. From “thought and language” to “thinking for speaking”, In J. Gumperz & S. Levinson (Eds.), Rethinking Linguistic Relativity 70-96. Cambridge University Press.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>鈴木ひろみ | ４．巻<br>11 |
| ２．論文標題<br>「場面外視点」と「場面内視点」から見る中国語と日本語 | ５．発行年<br>2020年 |
| ３．雑誌名<br>漢日語言対比研究論叢 | ６．最初と最後の頁<br>275頁 286頁 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>鈴木ひろみ | ４．巻<br>12 |
| ２．論文標題<br>言語情報の連続性に現れる差異について－中国語と日本語の比較－ | ５．発行年<br>2022年 |
| ３．雑誌名<br>漢日語言対比研究論叢 | ６．最初と最後の頁<br>203頁214頁 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

| |
|---|
| １．発表者名<br>鈴木ひろみ |
| ２．発表標題<br>《漢日空間位移事件途径顕性化対比研究》 |
| ３．学会等名<br>《漢日対比語言学研究（協作）会》（国際学会） |
| ４．発表年<br>2019年 |

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

| | 氏名<br>（ローマ字氏名）<br>（研究者番号） | 所属研究機関・部局・職<br>（機関番号） | 備考 |
|---|---|---|---|

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計1件

| | |
|---|---|
| 国際研究集会<br>《漢日対比語言学研討会》 | 開催年<br>2019年～2019年 |

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
| --- | --- |